

様式2

事後評価報告書

1. 研究課題名:「がん間質細胞の生物学的理解と治療標的としての検討」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:落合 淳志（国立がんセンター 東病院臨床開発センター臨床腫瘍病理部 部長）

2-2. デンマーク側研究代表者:Lone Ronnov-Jessen Petersen コペンハーゲン大学 生物学専攻 准教授）

3. 総合評価: B

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

間質繊維芽細胞の種類の多様性と、これががん細胞の生着に及ぼす影響およびその分子機構の解明を進め、がん細胞生着能の亢進には繊維芽細胞の RhoA の活性化が重要であることを解明した。また、がん細胞は間質繊維芽細胞からの作用により、浸潤能や運動能に大きく違いが出ることが明らかになった。

培養が難しい研究材料（繊維芽細胞）を国際的な協業にて挑戦したことは評価するが、日本、デンマークの両研究室の共同研究における相補性が明確でなく、不死化されていない繊維芽細胞が長期間培養できないことも、過去の経験知から容易に予測できたのではないと思われる。

今後、本研究交流成果に基づいた共著論文、学会発表などが行われることを期待する。

(2)交流成果の評価について

2011 年 3 月の地震のため、デンマーク側からの若手研究者の受け入れができなかったことは不可抗力だが、人的交流は研究期間内に双方から一度ずつの訪問が行われたのみで、実際には若手研究者の交流はほとんど行われなかったようである。また、本研究交流に関するワークショップ、セミナー、シンポジウム等も実施されなかったようである。

多忙な研究者間の事情を考慮したとしても、テレビ会議システムなどを利用した共同セミナーなどの開催の余地があったのではないだろうか。

3. その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

発表された論文も日本側の成果によるものであり、研究交流の成果によるものではないように見受けられる。本研究交流に基づき、今回の研究を更に発展させる共同研究の提案が日本側から予定されており、今後の活発な交流、例えば当初の計画であった表面抗原の検索等を期待したい。